

報 告

長岡高専インターアクトクラブ活動報告 2013 —理念・方針・活動・沖縄高専との交流・安全対策—

佐藤 公俊¹・吉川 友子²・野口 一英³・松島 武司⁴・荒牧 和沙⁴

¹ 一般教育科—社会 (Liberal Arts-Social Sciences, Nagaoka National College of Technology)

² 香川大学大学教育開発センター (Center for Research and Educational Development in Higher Education, Kagawa University)

³ 教育研究技術支援センター (Technical Support Center for Education and Research, Nagaoka National College of Technology)

⁴ 環境都市工学科 (Department of Civil Engineering, Nagaoka National College of Technology)

Annual Report 2013 of Interact Club

in Nagaoka National College of Technology

- Report for the Idea, the Policy, the Activities, the Security Measures and the Students
Interaction of Interact Club in Nagaoka National College of Technology -

Kimitoshi SATOH¹, Tomoko YOSHIKAWA², Kazuhide NOGUTI³,
Takeshi MATSUSHIMA⁴ and Kazusa ARAMAKI⁴

要旨

本稿では、長岡高専インターアクトクラブの理念・方針・安全対策、主に 2012 年夏から 2013 年夏にかけての活動と、新設の沖縄高専インターアクトクラブと国際交流委員会 (World Student Bridge : WSB) とのお互いに行き来しての多文化・多世代・国際交流を紹介し、安全対策における若干の課題を検討する。

長岡高専インターアクトクラブは、1965 年に国際ロータリークラブ第 2560 地区の長岡ロータリークラブの認証により創設され、児童養護施設の大葉寮への 40 年来の訪問、被災地への義捐金の募金、および、ペットボトルキャップ収集などの社会貢献活動を行い、社会問題の認識の目と対応の手を養ってきた。また、この 20 年来、スキー研修、バーベキュー、長岡大花火見物、餅つきなどをおした本校や他校の留学生との文化・国際交流活動を行い、国際理解の目と交流の手を鍛えてきた。メンバーは本校のほとんどの留学生を含めて 50 人前後である。

沖縄高専国際交流委員会 WSB (通称ワサビ) は、2010 年 4 月に設立された。また、沖縄高専インターアクトクラブは 2013 年 5 月 14 日に国際ロータリーの認証により創設された。メンバーは留学生を含めて同年 5 月現在で 30 人である。2011 年 3 月から長岡高専インターアクトクラブと沖縄高専 WSB とは、3 月の国際交流スキー研修と 9 月の沖縄交流平和研修で、お互いの地域を行き来しての遠隔地間の交流を行い、留学生とロータリアンも交えての多文化・多世代交流を続けている。

Key Words: Interact Club, Rotary Club, World Student Bridge, Okinawa, students exchange

1. はじめに

長岡高専インターアクトクラブは、国際ロータリー第 2560 地区（認証時は第 256 地区）の長岡ロータリークラブの認証のもとに昭和 40 年に国際交流と地域貢献を通じた新世代育成を目的として設立され、長年にわたり積極的に活動している。本稿では、長岡高専インターアクトクラブの理念・方針・安全対策、主に 2012 年夏から 2013 年夏にかけての活動と、沖縄高専インターアクトクラブ（国際交流委員会 WSB）とのお互いの地域を行き来しての多文化・多世代・国際交流を紹介し、行事实施の際の安全対策における課題を検討する。

高専における国際交流活動は、各校の試みや努力により、相当の実績を積み上げてきていると言えるだろう。高専の学生団体間の遠隔地域文化間交流と国際交流および多世代交流をあわせもつ多文化交流が徐々に拡大していることについての研究報告は、吉川と佐藤による高専フォーラムにおける報告¹⁾と、本稿に先行する 2012 年度の報告²⁾がある。本稿では後者で検討した安全対策における課題をさらに展開して考察する。

本稿は長岡高専インターアクトの理念による社会貢献活動と多地域・多文化・国際交流活動の現状、および、当クラブの活動方針である学生の自立的協働性の養成について報告する。つまり、学生が個別の行事を実施する際、自主的に企画・討議・役割分担を実行するためのサポート策や安全策について報告するものである。学生が自主的自立的に行事を実行することの効果は、学生の意欲／意識／価値／視野／世界の拡大と、学生間の相互理解からの人権保障と平和への意識の形成と共有にあると考えている。

筆者らが活動を支援している、長岡高専インターアクトクラブと沖縄高専インターアクトクラブ（国際交流委員会 WSB）の学生団体は合同で、2012-2013 年度も冬のスキー場と夏の沖縄での多文化・国際交流研修を企画・実施した。本稿では、学生による自主的な多文化交流・国際交流活動、および、そうした活動の準備過程でのコミュニケーション能力とリーダーシップの成長、諸活動を通じた多様な交流と多文化の相互理解による視野の拡大や平和への意識の形成と共有について紹介したい。

筆者らは、こうした活動の課題をインターアクトの部会で取り上げ、検討し、多文化・国際交流の意義を掘り下げ、学生団体活動の改善策を共有した成果報告書を作成して、高専やロータリークラブなどに報告してきた。そして、今年度の検討結果を踏まえて、次年度以降も学生による企画実施・研究報告・協働での評価改善のサイクルを継続してゆくものである。

2. 沖縄高専インターアクトクラブの誕生

沖縄高専インターアクトクラブは、2013 年 5 月 14 日付けで国際ロータリーの正式な認証を受け、設立した。国際ロータリー第 2580 地区（東京都および沖縄県）の那覇北ロータリークラブをスポンサーとし、同年 9 月 4 日に那覇市の沖縄かりゆしアーバンリゾート・ナハにおいて、3 名の代表学生と引率教員が招待されて認証伝達式および祝賀会がとり行われた。これにより、沖縄県で 6 つ目、全国 51 国立高専の中では、歴史ある長岡高専に続く 2 つ目のインターアクトクラブとなった。

沖縄高専インターアクトクラブは、多文化交流の活動を行ってきた国際交流学生委員会（World Student Bridge : WSB・通称ワサビ）の本科 1~3 年生のメンバーで構成され、地域社会への貢献と多文化国際交流を目指して結成された組織である。クラブの母体である WSB が長岡高専等で見られた国際交流目的の学生団体を見習って 2010 年 4 月に組織されたものであり、他高専の団体との交流を望む WSB 学生側からの積極的なアプローチが長岡高専に受け入れられ、二高専間で順調に交流が重ねられてきた経緯を鑑みれば、長岡高専同様のインターアクトクラブ設立を沖縄高専の学生が希望するに至ったのは、極めて自然な流れである。沖縄高専 WSB 学生は、長岡高専との交流行事や情報交換を通してインターアクトクラブという活動を知り、平和と奉仕というロータリーの理念を学び、長岡高専生のように地域社会に貢献したいと考えるようになった。

沖縄高専インターアクトクラブの認証伝達式の直後、長岡高専生 13 名（うち留学生 1 名）と社会人 2 名を迎えて 4 泊 5 日の沖縄研修が行われた。これには、のべ 12 名（うち WSB 所属の留学生 2 名）の沖縄高専インターアクトクラブ学生、卒業生 2 名、顧問教員 1 名が参加し、同じペンションで生活を共にしながら、交流を深めた。長岡および那覇北ロータリークラブの支援・協力もあり、沖縄高専における交流活動発表会のほか、海洋博記念公園（美ら海水族館）、琉球新報、沖縄科学技術大学院大学（OIST）、首里城／県立博物館の見学、嘉数高台公園における平和学習、恩納ナビビーチでの自然体験と、盛りだくさんで充実した研修内容であった。この研修の成果が、とくに受け入れ側の沖縄高専生を中心とした学生による自主的な計画実施によるものであることを指摘したい。今後も、二高専間の交流にとどまらず、同地区のインターアクトクラブ間の交流、多業種に渡り実社会の重鎮が集うロータリークラブメンバーとの交流や様々な社会貢献活動を行っていくことが期待されている。



図-1 企画・運営にあたったインターアクト部員



図-3 日本各地から参加した各国の留学生たち

3. 国際交流スキー研修

長岡高専インターアクトクラブでは、毎年度 12 月に冬季研修，3 月に春季研修として年 2 回の「スキー国際交流研修」に参加し，運営に協力している。

(図-1) 今年度で 11 年目となる本研修は，2003 年度の第 2560 地区のインターアクトの年次大会で本校インターアクトと，新井ロータリークラブの佐藤明臣氏が出会ったことがきっかけである。現在，佐藤氏がこの交流研修を主催されており，毎回大変お世話になっている(図-2)。氏のご協力を得て，2004 年の春季に豪雪地帯の新潟県妙高杉の原スキー場において本校の日本人学生と留学生が，交流研修を実施したのが「国際交流スキー研修」の始まりである。

本研修の目的は，第 1 に，長岡高専に在籍している留学生や他校の留学生たちに雪国ならではのスキーやスノーボードを体験してもらうことである(図-3)。そこでの日本人学生との異文化交流コミュニケーションを通じてお互いの文化を認識してもらい，学生同士の交流を深めてもらうということも重要な目的である(図-4)。これは，インターアクト

クラブの理念の「国際交流」に該当する部分で，ロータリークラブをはじめとする様々な組織や皆様の協力を得て現在まで継続して来た活動である。

本校に在籍している留学生には，マレーシアやベトナムをはじめとして熱帯のアジア地域から留学して来ている学生が多く，自国では雪を見たことがないという学生が多い。そのような学生達は，日本でも有数の豪雪地帯である長岡市で生活していても沢山の雪に触れ合っ楽しむ機会があまりなかった。そのような状況では，せっかく日本に留学して来てもその地域での文化を理解できないということになってしまう。しかし，本研修に参加してからは長岡や日本の文化に積極的に関わりたいという留学生が増加している。また，長岡高専の日本人学生でも，留学生とほとんど交流したことがないという学生が多かった。そのような学生たちも，インターアクトクラブの様々な活動や本研修を通じて異国の文化と交流して理解し，改めてお互いの文化について考えるという学生が増えてきている。

近年では，交流の輪が広がり本校に在籍している留学生や日本人学生が他高専や他大学の友達をこの研修に呼び，一緒に交流活動に参加するというこ



図-2 佐藤明臣氏(左端)と杉の原スキー場最高地点で



図-4 雪像つくりで国際交流

が多くなっている。また、2011 年度春季研修からは沖縄高専国際交流委員会 WSB の学生が本研修に参加するようになり、異なる地域同士の文化・平和交流が一層進んでいる。

2012 年 12 月末に実施した「冬季国際交流スキー研修」では、本校の留学生が日本に留学している長岡技術科学大学や富山高専等の様々な学校の友人とともにこの研修に参加した。その留学生達の出身国はマレーシアのみならず、モンゴルやイランといった多様な地域におよんでいる。WSB に所属している沖縄高専生も数人参加している。この冬季研修は参加者が過去最大で 70 人を越えた。3 日間ともに、日中は妙高杉の原スキー場にてスキー・スノーボードを留学生・日本人学生の混合グループで滑り、上級者が初心者に指導し、見守るといった積極的な交流も見られた。

夜になると宿泊場所の妙高少年自然の家にて、交流会を開催した。そこでは、留学生と日本人が混合のペアで体を動かしながら楽しむレクリエーションに挑み、本校の日本人学生がその場でお菓子を作って振る舞い、おいしくいただき、パイ投げなどが交流パーティを大いに盛り上げた。

2013 年 3 月初旬に実施した「春季国際交流スキー研修」では、宿泊場所をナチュラルイン翠山という杉の原スキー場の直下にある民宿へ変更した。春季では留学生が他高専から呼んだのはモンゴル人の友人が 9 人、沖縄高専生が 7 名、新潟県内の各高等学校に在籍している交換留学生が 5 名ほど担当ロータリークラブの方々と共に参加した。冬季ではあまりにも人が多すぎたせいで人数管理が大変であったため人数を制限し、参加者総数は約 50 名であった。

2 泊 3 日の初日にはスキー等は滑らずに留学生、日本人を混ぜたグループを作り、交流レクリエーションとして、グループ対抗雪合戦や雪像づくりを開催した。雪像は各グループごとに、雪だるまや猫、有名キャラクターや沖縄名物のシーサー等をメンバー全員で協力しながら作成していた。同じグループにならなければ話す機会が少なかった日本人と留学生が互いに協力しながら雪像を作って、親睦を深めていった。これは、スキー場に繰り出す前の行事として、各グループでアイスブレイキングを行い、互いの自己紹介等をしたおかげでグループ行動がスムーズに展開できたと考えられる。夜間には恒例の交流会を実施した。そこでも WSB も含めた日本人学生と留学生が自然と話をしながらレクリエーションを楽しむということができていた。また、毎回この研修に多大なご支援をいただいている佐藤明臣氏に 10 周年目という節目を祝う記念品を贈呈して感謝の気持ちを表した。さらに、時に応じて、人生の先輩であり経営者でもあるロータリークラブの

方々に講演をさせていただいたことに感謝したい。

2012 年度春季研修に参加した WSB の学生には、長岡市などにホームステイしてもらい、翌日、長岡高専インターアクトクラブ主催で長岡市街や長岡高専の施設を紹介して交流を行った。

このように、本研修の活動は回を重ねるごとに参加人数など規模が大きくなってきた。それは、本研修が長岡ロータリークラブ、妙高市や新井ロータリークラブの方々、スキー場や雪つばきの会といった組織の諸先輩からのご理解とご支援・ご協力のおかげで、ここまで成長できたと感謝している。本校の留学生には、同国の先輩から我々クラブの存在や本研修があるからという理由で留学先を長岡高専に決めたという学生もおり、沖縄高専生にも本研修に参加したことがきっかけで進路を長岡技術科学大学に決めたという学生もいる。その話を聞いて、我々は交流の輪が世界へ着実に広がっているのだと強く感じることができ感動した。また、卒業後にも本研修で知り合えた学生や社会人の方々ととの交流を積極的に継続している学生も多くいる。

しかし、2012 年度の冬季研修にて見られたように、参加人数の過多により、運営にあたるサポーターや学生スタッフの負担の著しい増加という問題点が浮上して来ている。他にも、マイクロバスのチャーターや現地の方々による車移動の協力がなければ人員の移動が困難になっているという点や、宿泊施設における他の宿泊者との騒音などによる摩擦という点、安全面においてもスキーやスノーボードで滑る際の事故や怪我といった危険性、参加申込連絡から現地での団体行動における連絡手段の不確実さ等が問題として挙げられる。それらの問題の改善策として、2012 年度からは葉を作成して参加者全員に配布し、全体の意思統一と情報共有を図り、それだけではなく国際交流研修への参加者であるという意識の変化を促した。その他にも滑る前の安全講習の徹底や団体行動のために指定腕章装着、携帯電話を利用した確実な連絡手段の確保などの改善を推し進めている。また、近年では本研修は佐藤明臣氏を中心とするサポートチームが主催し、本校インターアクトクラブは主管クラブとして企画・実施を行うという体制へ移行している。そのために、本校学生による企画立案等が重要になっており、関係各位の方々と協働しながら早期準備を進めることが望まれる。

2013 年度冬季研修で第 20 回目を迎える本研修では、多文化・国際交流と相互理解という趣旨を今までよりも推進できるように改善しながら、今後も見据えた学生主体の自立した企画運営を、上級生から下級生へ継承しながらクラブの成長を進めていこうと考えている。

4. 沖縄交流研修

2013年で第3回目を迎えた沖縄交流研修の目的は、本土と異なる文化・状況の地域での「国際平和の理解」、研修を通しての「自主性・意欲・自己啓発の向上」のリーダーシップの育成、及び、社会貢献へ向けての「視野の拡大」である。これらのことは、長岡高専インターアクトクラブの学生が、社会に羽ばたく新世代の一員として、国際理解と社会奉仕というインターアクトの理念を実現し達成してゆくことである。本報告に先行する『長岡高専研究紀要』への報告²⁾でも述べたように、長岡高専インターアクトの沖縄研修は、沖縄高専国際交流委員会 WSB の学生が、2011年3月の「国際交流スキー研修」に参加したことから始まったのである。12月と3月に新潟で行われるスキー研修や9月に沖縄で行われる沖縄研修は、互いの地域における異文化・多文化体験であって、そこでの経験は高専生が感受性豊かな学生の内にしか感じる事ができない事である。それは様々な刺激となって、自身の成長に大きく繋がっている事を学生は日々実感している。

沖縄研修が初めて行われた2011年9月の当時、インターアクトクラブ顧問の佐藤の引率により学生3名の参加があった。この研修は同年3月11日の東日本大震災の状況の中で急遽実施したこともあり、スケジュールにおいても不備が多かった。メインイベントでもあった沖縄高専訪問においては、沖縄高専側から熱烈な歓迎を頂いた。また、主な目的である互いの活動の情報共有は行えたものの、沖縄高専生の負担が大きかった為に、時間の関係もあって、交流の時間は主に移動の最中の車内と、最終日前夜の宿泊先でしかとれなかった。経費が高額であるので宿泊日程は変更しないとして、改善すべき問題は、早期から計画を立てて、交流を行う為の時間と場所を確保することであることが研修後に確認された。

その後に行われた2012年3月の国際交流スキー研修に WSB の学生が参加したことにより、2012年度の第2回目の沖縄研修では学生の意識と参加が積極的になり、本校の留学生3名を含め14名もの学生が参加した。この時の研修では、第1回目に行われた研修において達成できなかった点や反省点を考慮し、移動手段は極力少なくして車での移動とした。また、最も大きな改善点は宿泊先の変更によるものであった。第1回目の研修においても、同じ宿に参加者全員で宿泊する事が沖縄高専生からも大きな支持を得た。第2回目には早期計画の実施も行うと共に、沖縄高専生の多大な協力を得て、“ドミトリイ・チュラマーチ”にて沖縄高専生を交えての参加者全員で合宿研修を行った。この改善により、前回よりも交流の時間を多くとることができた。更に宿

泊先のオーナーのご厚意により、普段目にする事のないウミガメの放流を体験することができた。日本人学生だけでなく、参加した留学生からも貴重な体験ができたという感激の声をいただいた。

また、この時の研修は沖縄高専にインターアクトクラブを設立する為の準備の一端ともなった。第2580地区石川正一ガバナーを始め、那覇 RC、那覇西 RC の協力の下、長岡高専インターアクトクラブは、沖縄県の5つの高等学校のインターアクトクラブと那覇興南高等学校における交流会に参加した。その際、沖縄高専 WSB の学生たちもインターアクトクラブ設立を目指し、様々な国際交流活動や地域奉仕活動を行っている団体として同交流会に参加した。この様な交流会が初めての沖縄高専生は他校の様々な活動に耳を傾け、インターアクトクラブの目標や活動を理解した。また本校インターアクトクラブの学生も他地区の交流会において活動に関する意見交換をする事で貴重な経験を得ることができた。この後、多方面の協力を得て、2013年度より沖縄高専にもインターアクトクラブが設立された。今後も沖縄高専 WSB と、また、インターアクトクラブ間でも様々な交流を行っていきたいと考えている。

この様な研修を機にして、学生たちは様々な面に目を配るようになり、様々な活動に積極的参加するようになり、活動への意欲が向上してきた。こうしてこの研修の目的でもある理想的なインターアクターを目指す学生が増えてきたことは事実である。

2013年度の沖縄研修(図-5)においては、2012年度の研修後の意見で反省点を確認して、早い段階で当年度への改善点を確認してきた。また、上の様な、多文化と国際交流活動を全国に発信していく一つの拠点として、SNSである Facebook を有効的に活用して、長岡高専インターアクトクラブの理念と活動を世界へ発信してきた。新たに設立された沖縄

2013	長岡高専インターアクト沖縄研修しおり
*目的	学生の自主的な多文化交流を通し、学生自身の成長と視野の拡大を図る。
*期日	2013年9月14日(土)～9月20日(金)6泊7日
*交流会会場	沖縄工業高等専門学校
	沖縄県名護市辺野古905 電話 0980-55-4003
*沖縄滞在中の宿泊場所	沖縄県国頭群恩納村名嘉真 2288-363
	希望ヶ丘 ペンション研修館 2号館 3号館
	電話 098-967-8661 (24時間対応)

図-5 沖縄研修のしおりの概要



図-6 沖縄高専での活動報告会

高専インターアクトクラブのメンバーがこの SNS に参加している事もあり、同様の活動の実施を考えている次世代の学生にも大きなきっかけと刺激を与えられるであろう。また、この様な情報を学生が自ら発信していく事で、学生自身が活動に自信と誇りを得ることができ、今後さらに活発に活動を行ってくれるであろうと考えている。

2013 年の沖縄研修でも活動報告会が開かれた(図-6)。以下に、参加者の感想文から、意識の変化が読み取れる部分を引用する。巨大な米軍基地や航空機(図-7)を目の当たりにして参加者の印象は強く、沖縄県民の方の基地反対の気持ちや、基地依存への若い人たちの気持ちを知って、いろいろなことを考えはじめたようだ。

「今回、僕は沖縄研修で沖縄高専の先輩方と交流したことで様々なことが心に残りました。たとえば嘉数高台から米軍基地を見たときのことも印象に残っています。嘉数高台から基地を見たときその大きさに驚きました。新聞社でも基地その大きさを表した



図-7 普天間基地へ向かうオスプレイ

図を見たけど実際にみて確かに生活する上で支障がでると思いました。また、すぐ近くに住宅もあり危ないと思いました。」

「米軍基地。嘉数高台から見てその大きさに驚きました。沖縄の人たちは嫌でもその影響を受けることになるのだと考えて、沖縄高専の人に米軍基地があることについて聞いてみたのですが、やはり沖縄の人たちの不満は大きいようです。いろいろとんだり、ぶっそうだし、不安にもなるだろうと思いました。これからはこういうこととも考えていくことにします。」

沖縄高専生によれば、次のようなことが基地問題についての沖縄県民の一般的な了解だと思われる。

「住宅地の真上を米軍の飛行機や戦闘機が飛行するのは墜落や部品の落下等の危険が伴う為県民としては基地の完全撤去が平和な生活を願う心である。しかし、基地内外において米兵を相手とした商売があり、その雇用があるために、基地の完全撤去を求めるとは一部の県民の生活を前者とは別の意味で脅かすことになる。そのため、基地の完全撤去を全県民が一概に求めることは難しい状況となっている。」

市民の立場や県民の願いから、基地撤去に原則賛成として、さらに基地経済に関係する人々の生活の基盤形成のため、単なる基地撤去策にとどまらず、沖縄経済の自立化をはかることが問題であろう。

次に、参加学生は新聞社の重要な施設と沖縄科学技術大学院大学(OIST)を見学して、自分の進路を展望している(図-8)。



図-8 琉球新報社見学

「また、今回の研修では琉球新報さんのところに見学をしましたが、普段入れないところまで見せていただけて良かったです。新聞を作るにあたってすごく熱心に取り組んでいる情熱を感じました。自分も何か熱心に取り組めるような研究や仕事をしてみたいと思いました。次回の沖縄研修も参加したいです!」

「沖縄科学技術大学院大学 (OIST) を見学できたことが自分の中ではものすごく良かったと思います。僕は国に大学院だけがある大学、大学院大学なるものが存在するなんて知りませんでした。日本国内でもいくつかある大学院大学の中でも最も新しいこの OIST で最新の研究が見ることができました。そのほかにも国際化を目指しているこの大学の学内の共通語が英語でしたり、教員、研究者の過半数以上や学生のほとんどは外国人ということにとっても魅力を感じました。世界でも高水準の教育を目指したり、いろいろな魅力があります。自分もこのような学校に進学できる様になりたいと進路にも大きな影響が出たと思います。この研修に参加できて本当に良かったと思っています。」

最後に、参加学生は、研修旅行に参加したことの意義として、沖縄高専の学生との交流して視野を広げたこと、また、沖縄現地を体験して発見し感じるものの大切さがわかったこと、こうした体験により「価値感」が変わったこと、沖縄のイメージが、おそらく良い方に、変化したことを挙げている、

「今回の沖縄研修は自分にとって…、新しい発見ばかりでした。沖縄料理や文化の違いなど、様々な場面で驚くことが多々ありました。そのような文化の違いについて沖縄高専の学生さんと話したりするのはとても楽しかったです。」

「ぼくは今回の沖縄研修を通して実際に見てみないとわからないことが多かったと思うので実際に行つて自分の目で見てみることも大事だと思いました。」

「沖縄研修を通して…学んだこと (は) 行って、見て体験するとそれに対しての価値感ががらっと変わるということ」

「僕はこの研修で沖縄に対するイメージが大分変わりました。そして、知ることで沖縄を身近に感じるができるようになりました。」

「今回の沖縄研修は、ご飯を自分たちで作ったり、

お風呂がなかったりしていろいろ大変なこともあったけどみんなケガなく、楽しく沖縄を満喫できたと思います。来年も行けたら行きたいです。」

こうして、沖縄研修に参加した学生が沖縄の体験から視野を広げ、沖縄との交流で異なる文化や世界を発見して、新たな意識を獲得してくれたことは、今回の研修の大きな成果と高く評価できるのである。

5. 安全対策

インターアクト沖縄研修は学生の自主的な多文化交流が目的である。また互いの地域特有の自然環境での交流も行われる。学生が意識していないと考えられる危険源についての紹介と、事前対策について述べる。

沖縄における地域特有の危険源とは海洋危険生物の存在である。沖縄県ホームページ、沖縄県警ホームページで海洋危険生物が多数示されている。また過去 10 年の沖縄全域における被害は年間 200 から 300 件報告されており死亡例の報告もある⁴⁵⁾。これらは海洋危険生物の生息している海域へ人間が進入したことにより発生している。つまり危険源と人間の行動範囲の重複により被害が発生したのである。これに対して有効なのは隔離の原則に従い危険源と人間を隔離することである。沖縄県で行われているハブクラゲ防止ネットを使った対策は隔離の原則に則った安全方策といえる。しかし、偶発的な接触による海洋危険生物の被害が無いとは言い切れない。

ところで、沖縄県ホームページではそれら危険生物の注意喚起と共に、対処方法も指示してある。しかし生物により対処が異なるケースが見られ、同じ処置で逆の効果を生む場合もある。適切な対処を知る人間による処置が必要であると考えられる。

そのため、本研修の事前対策として

1. 危険源を知らない長岡高専の学生だけで海に近づかないこと、という事前指導を行った。
2. 海洋危険生物に被害を受けた場合、現場での処置で済ますのではなく、速やかに医療機関に搬送することとした。
3. 医療行為を受ける場合の事前準備として、既往歴、アレルギーの有無、服用中の薬に関する調査を行った。研修参加予定学生 13 名中 4 名がアレルギー又は医薬品を服用中という結果を得た。調査結果は研修同行者がまとめて携行し、学生を医療機関に搬送する場合医師に提出出来るよう準備した。

本研修中にビーチにおける交流が実施された。沖縄高専側の配慮で、適切な対策が取られている場所が選定されていたこともあり、幸いにも医療行為を受ける学生は出なかった。

しかし、アレルギーを持つ者や薬を服用し続けなくてはならない者は本研修参加者にも含まれていた。学校全体でもそのような学生は増えているとみられる。研修等で親元を離れる際に適切な医療行為が受けられる準備が必要と考える。

6. まとめと課題に対する改善状況

以上の学生の感想を見ると、多文化／異文化／他文化との交流を通じた、学生の意欲／意識／価値／視野／世界の拡大と、相互理解・信頼による平和意識の形成と共有、および、学生の気づきや育ちという教育効果を確認することができ、事業とサポートとの目的を達成しつつあるといえる。

今後の部活行事の指導や学生活動の支援に当たって、前稿²⁾であげた三つの課題に留意して学生の成長を支援してゆきたい。三つの課題とはつぎのような3点であるが、以下では、それぞれの改善状況についてまとめておこう。

1. 部活動の持続性のため、部活動で得たスキルを継承する仕組みの構築の必要性
2. 自主的な学生団体としての継続的な事業実施体制を構築する必要性
3. 学生の行事实施に当たっての安全対策としてのリスク削減の方策の必要性

1の部活動で得たスキルを継承する仕組みの構築については、2013年度は前年度部長が、新年度の副部長となって新部長を補佐し、新部長とこの副部長とが様々な行事プロジェクトの指揮を分担することを通じて、前部長から新部長へクラブ運営のスキルの継承をはかることとした。この指導部の指示の下に、行事プロジェクトの企画と実行は指導的部員がリーダーシップをとる体制が取られた。

具体的な改善策として、2012年度からすでに、各研修ごとに葉を作成して参加者全員に配布し、全体の意思統一と情報共有を図り、さらに多文化・国際交流研修への参加者であるという目的意識の強化を促した。

国際交流スキー研修では、学生主体の自立した企画運営のための臨時のコアメンバー会議を毎週開催して、多文化・国際交流と相互理解という趣旨をより推進できるように企画を立案・改善しながら、企画・運営のノウハウを上級生から下級生へ継承する

機会としている。

2の自主的な学生団体としての継続的な事業実施体制を構築する必要性については、インターアクトクラブのメンバーが、クラブ顧問や支援者からある程度自立して、自主的な学生団体としての継続的な事業実施体制を構築し確保してゆくことが課題である。意思決定の透明性の確保や、協働体制および活動資金の確保の仕組みづくりが必要である。

近年では国際交流スキー研修は佐藤明臣氏を中心とするサポートチームが主催し、本校インターアクトクラブは主管クラブとして企画・実施を行うという体制へ移行している。そのために、本校学生による企画立案等が重要になっており、関係各位の方々と協働しながら早期に準備を進めることが望まれる。

最後に、3の部活の行事实施に当たっての安全対策について、改善点を把握しよう。当然のことであるが、こうした学生活動への支援には多大な労力が必要で、実施時のリスクがあり、重大な過失や故意が生じないようにする準備と心構えを前提として、想定されるリスクを低下させるために必要な対策を講じる必要がある。

インターアクトクラブの活動は、学内外で実施され、その地域の高校、他地域の高専、留学生、社会人と様々な背景を持つ集団が行事を通じて交流する。このような複雑な交流がある中での安全対策について考察しなければならない。

安全の定義として、安全規格であるISO/IEC Guide51:1999では「安全は、リスクを許容可能なレベルまで低減させることで達成される。」³⁾とある。すなわち目的とする活動に対して発生するリスクを評価し、適切な対策を実施することでリスクの減少をはかり、「リスクを許容可能なレベルまで低減させること」で、安全性が向上するといえるのである。

国際交流スキー研修でのリスク評価と対策案を示すと、軽減すべきリスクは以下のことである。

- ・ スキー、スノーボード滑走中の衝突、転倒による怪我。
- ・ 雪初心者による転倒。
- ・ 雪への飛び込みによる隠れた障害物との衝突。
- ・ 学生、引率間での連絡不備による、状況変化に対しての対応遅れ。

これらリスクを軽減する方法として以下のことが実施された。

- ・ さらに多くの社会人との協力
- ・ 連絡体制の徹底構築

具体的には、インストラクターまたは現地の事象を理解している者と他地区の学生または留学生でパーティを組んで活動すること、活動期間中の連絡が逐一行われるようなマネジメント等がリスク低減方法として挙げられ、試行された。

2012年度の国際交流スキー研修では、長岡高専インターアクトの学生たちは、積極的に他地区の学生や留学生とパーティを組んでおり、学生同士の交流を図りつつ安全性を高めている。また、滑る前の安全講習の徹底や、団体行動のために指定腕章装着、携帯電話を利用した確実な連絡手段の確保など、改善が推し進められた。

沖縄研修のリスク評価と対策案を国際交流スキー研修同様に示す。研修する地域の特性と実施時期から軽減すべきリスクとして以下の事をあげる。

1. 台風による活動計画の変更
2. 野外の活動によって熱中症にかかること
3. 海洋危険生物による毒物被害

これらについてのリスク低減対策として、

1. 現地の受け入れスタッフと事前の打ち合わせ、旅行保険による金銭的保証をはかり、
2. 熱中症について、しおりに記載し水の摂取を勧め、
3. 海洋危険生物について「5. 安全対策」で述べた対策を行った。

「2. 沖縄高専インターアクトクラブの誕生」で述べたように2013年9月4日に沖縄高専インターアクトクラブが認証を受けた。これによって、国内2校目の国立高専のインターアクトクラブが生まれた。2校のインターアクトクラブ間で交流研修を行う意味は、お互いの活動内容の報告、さらには地域社会と関わるインターアクトクラブの活動をその地域を含めて知ることにあると思う。その方法として、電子メールやテレビ会議のような情報交換よりも学生が直接相手の地域へ訪れ、普段生活している社会を体験することは効果的な方法ではないかと思う。

このように遠距離への移動を含む交流では、学生自身の危険感受性だけに頼った安全対策では十分と言えない。訪問先について知識を持つ人物や危険源について検討できる者による、リスクの検討と適切なリスク低減の対策立案が求められる。さらにインターアクトクラブとして活動している者は未成年が多いため、多くの社会人によるサポートの必要性は高いと言える。

今後の方針として、筆者たちは、上記のリスク管理を前提にしつつ、学生の国際交流と社会貢献活動を実施するために、学生が企画・実行のスキルを継

承する仕組みを構築すること、学生自身で情報伝達と意思決定の共有性と協働体制を確立すること、および、学生による企画立案を関係各位の方々と協働しながら早期に準備を進めること、これらの支援を行ってゆきたい。引き続き有効に支援してゆくために、上掲のように把握された課題を学生たちと話し合い、年次の報告書を作成して各所に報告し、さらに、改善を実施してゆく予定である。

謝辞： 沖縄交流研修やスキー国際交流研修などの行事の実施に当たり、長岡ロータリークラブ、那覇北ロータリークラブから様々な形で大きな支援を受けたことに深く感謝する。

参考文献

- 1) 吉川友子, 佐藤公俊: 多文化交流を目的とした高専生の課外活動について, 平成24年度全国高専教育フォーラム, <https://www.kosenforum.kosen-k.go.jp/entry/genko/00215.pdf>, 2012
- 2) 佐藤公俊他: 学生団体による高専間交流の現状と意義ー長岡高専インターアクトクラブと沖縄高専 WSB との交流ー, 長岡工業高等専門学校研究紀要, 第48巻, pp35-36., 2012
- 3) ISO/IEC Guide51:1999, Safety aspects – guidelines for their inclusion in standards (対応 JIS: JIS Z 8051:2004, 安全側面ー規格への導入指針)
- 4) 沖縄県ホームページ: 海洋危険生物について, 過去の被害状況, <http://www.pref.okinawa.jp/site/fukushi/yakumu/yakumu/documents/h14-h24higaijyoukyou.pdf>
- 5) 沖縄県ホームページ: ビーチ事業者への働きかけ, ハブクラゲ進入防止ネット設置マニュアル, http://www.pref.okinawa.jp/site/fukushi/yakumu/yakumu/documents/jellyfish_manual.pdf

(2013. 10. 15 受付)

